

## 横に仲よく

甲「先生が横に仲よくせよとおっしゃいましたが、あれについて聞かせてください。」

乙「横に仲よくせよとは、何を凌がないことでしょうか。」

甲「しのぐとは？」

乙「凌ぐとは、他人の右翼に行こうとする心です。せり心です。この心が随喜功德を破壊するのです。人の悪を見てはひそかにこれを喜び、人の善を見てはこれをころよからず思うのです。したがって、疑うべからざるを疑ったり、曲げて受け取ったり、けなしたり、妙に茶化して見たりするのです。私はそのために後になつて実にあいすまないことであつたと思うことがたびたびあります。この心のために、聞くべき多くのことを聞き逃したり、見るべき多くのことを観おとされていると思いません。」

甲「横に仲よくせよと言われる『横』ということが、どうもよくわかりません。」

乙「横とは平等を意味します。み仏様からご覧になれば、一切衆生は平等であります。とくに十八願の世界においては、豎に一切の上下の差別を認められず、一切衆生はみな横に一律平等であります。正信偈にも、横超の文字は二ヶ所に出ています。横超、豎出の文字は出ていません。でありますから、一切衆生はみな、横と言われているであります。これはきわめてはつきりしておかなくてはなりません。しかし、われら相對差別の世界においては、君あり臣あり、親子兄弟あり、師弟あり、先輩あり、後輩あり、智者あり、愚者あり。犬猫あり、蜻飛蠕動あり。したがって平等に一切衆生でありつつ、現実には豎に上下の差別を作っているわけであります。でありますから、私たちは、敬うべきは絶対に敬い、いたわるべきは絶対にいたわらなくてはなりません。したがって横に仲よくせよとお言葉も、しばらく、善知識に對してではなく、同行同侶の間を仲よくせよとお言葉と解することもできません。」

他を凌ぐ心は豎にはわりあい働きません。私たちは、子どもが失礼なことを言ったりしたりしても『人をばかにした』などと怒る者は少ないでしょう。笑つて受け流すこともできます。またずつと目上の人に對しても、たてつこうとしません。それは競走の相手にならぬからであります。自分と同等と思う人に対しては、どうも、なかなか、そうはゆきません。煩惱はどうしても右翼にゆきたがります。それゆえに少しのことにも直ちに腹を立てます。嫉妬します。まことに横にほんとうに仲よくならぬかぎり、豎にも真に仲よくなることはできません。小学校の子どもまでが、あの先生はだれだれさんにひいきせられるなどと言います。せり心です。競走心です。嫉妬心です。他を凌ぐ心に乗っている以上、いくらうわべは仲よく見えても、けつして真に仲よくなる事はできません。凌ぐ心は絶対に仲よくなれない心です。この心が嫉妬心となり、瞋恚となつて自他ともに傷つくのです。

『横になかよくせよ』との先生のお言葉は、まことにありがたいお言葉であります。如来はまことに一切衆生に對して、横に仲よくせよと抑せになることでありま

しよう。このお言葉はむしろ私こそ、一生涯守るべき言葉として頂戴すべきでありました。

しかし、しのぐ心はだれにでもあることでしょうか。

一。「總体人には劣るまじきと思う心あり、この心にて世間には物をしなうなり。仏法には無我にて候上は人に負けて信を取るべきなり。理を見て情を折るこそ仏のお慈悲よ」と仰せられ候。（御一代聞書）とあります。

およそ人の相の中で最も美しい相は、自己を没して他の一切の上に、隣人の上に生きようとする、他の一切の喜びを自己の喜びとし、隣人の苦しみを自己の苦しみとすることでしょうか。とかく私を表に出し、私を先にしたいのが私の心です。私はいたい犠牲という言葉はあまり好かないのでありますが、この意味でなら犠牲の心こそ実に養うべきだと思います。この心こそ真に『衆生往生せずば我も正覚を取らし』と一切群生を荷負し、つねに一切群生の最後に居たもう法蔵菩薩の本願に通ずる心でありましょう。いな、法蔵菩薩の本願そのものでありましょう。『和を以つて貴しとなす』との『和』も実にこの心に根底をおかねばならぬと思います。『地の底に埋もれよう』とは先生の『ご持言であります。この心に生きれば気分がたいへん楽になります。南無阿弥陀仏。』

甲「ありがとうございます。しかし生存競走と申します。生活は一面、競走ではないのでしょうか。」

乙「この不審は最も肝要なことでもあります。念仏者は無碍の一道であります。一面も二面もあつてはなりません。はつきりと、どつちか一つに定めなくてはなりません。はつきり申します。仏教はけつして競走ではありません。私は未だかつて、仏教のお話の中に、経典お聖教の中に、競走の文字を見たことも聞いたこともありません。もし生活は競走だと言うならば、『我行競走忍終不悔』となつていなければならぬ。決意すべきは、精進と競走とを混同してはならぬことです。競走と精進とは全然その本質を異にします。競走は他をしのぐのであり、精進は『衆生とともに』の世界であります。一つは外に向かう心であつて貪欲であり、一つは内に向かう心であつて本願であります。競走に勝つた者が真の成功者であるか、お念仏の行者が、真の成功者であるかは、本月の「聖光」を拝読すればわかります。私はまことに競走の究極に地獄を觀、精進の彼岸に浄土を觀ます。しかるに私たちは子どもの時から競走の中に競走の教育を受けてきました。この習気は容易に取れません。しかし、私はすべてをうちまかせてただお念仏申させていただきます。すべてお念仏の中に開けて来ます。南無阿弥陀仏。」

甲「ありがとうございます。よくわかりました。しかしどうも、そうはなかなか来ませんね。」

乙「それが群賊悪獸の声です。最後の我慢です。この我慢が最後の一線を食い止めていて、大法を受けつけないのです。そこを『理を見て情を折る』のです。断です。決定です。どうもどうもは助かりません。名号の利劍のみ能くこの最後の我慢を断ち、決定せしめたもうのです。

もう一度『御一代記聞書』を拝読しましょう。

『総体人には劣るまじきと思う心あり、この心にて世間には物をしなうなり。仏法には無我にて候う上は人に負けて信を取るべきなり。理を見て情を折るこそ仏のお慈悲よ。』南無阿弥陀仏。

凌ぐのでもなく、放縦に流れず、忍終不悔の精進を続けることこそ最も大事であります。如来本願のしからしむるものであります。」

甲「ありがとうございます。南無阿弥陀仏。」